

「精いっぱい演技見てほしい」

ACCS「サイコドン」

為男クン役の筑波学院大生・高安雅和さん



「役を演じられてうれしい。『サイコドン』をぜひ見てください」と話す高安雅和さん＝つくば市吾妻の筑波学院大

つくば・TX沿線版

研究学園都市コミュニティケーブルサービス(ACCS)が毎月第3・4週に放送している映画『つくつくばの七不思議サイコドン』。その第2話から毎回「為男(ためお)クン」として出演、気弱そうながら印象的な役どころで、ひそかなファンをつかんでいる高安雅和さんに話を聞いた。11月2日まで連日3回放映中の「サイコドン」では、高安さんが通う筑波学院大で9月末に行われた「つくこい祭」での収録が中心となっている。(赤嶺谷子)

「脚本の冠木新市さん、2年生の昨年、誰も受付けられない実践科目

の中に「演劇」があるので受講したら、その講師だったので。去年は冠木先生が書かれたラチオつくばのドラマ「ロボットナース」にメモ参照に途中から為男クンとして出演したのですが、いろいろ改善したい点もあるのでも引き続き今年も受講しています。

「演劇に興味を持ったのはいつから?」
中学の時に小栗旬の演技を見て、役者っていろいろな感情を出せてすごいな、と。でも高校2年までは、自分は足が悪いこともあり迷惑なのでは、と思って前に踏み出せなかった。でも3年になってやはり、やりたいことをやろう、悔いなくやりたいと思うてやったから、とても良くて楽し

くて。それが今日にわたるわけですね。

「為男クンとはどんなキャラクター?」
「少しどもる、時々カメラ目線でせりふを言うくせがある」と設定されていますが、それ以外は高安雅和のまま、と。

「ラジオも映画も初めてですね?」
はい。ラジオでは声の強弱の工夫が大変でした。録音の時には良いと思っても放送を聞くと、意外に声が小さかったり、もつと張ったほうが良いと思ったりすることがよくあります。

映像では表情の工夫が難しい。監督に「凶悪な顔を」と言われても、なかなかできなかったり。自分では役に成りきったつもりでも、気持ちと体が自分の思う通りにならなかつたり、練習ではうまくいっても本番だと緊張して失敗したりして、悔しいです。

「サイコドン」ではスタッフもキャストもいつも一緒ですが楽しいことは?

芝居には正解がないので、あれこれ試行錯誤し、こんな風でいいのかなと周りの方たちにいつも聞いています。不器用なので毎回つくこいくらい質問するんですが、「それで大丈夫、安心して」とも、監督や冠木先生、一緒に支えてもらっている人たちには普段の自分を知ってもらっている分、例えば「凶悪な顔」などでは、より凶悪に、というか、きちんと芝居をしている、精いっぱいやっている姿を見せたい、見てほしいと思っています。

「演劇とは今後どう付き合っていくつもり?」
ラジオも映画も、貴重な経験をさせてもらっていると思います。卒業後も趣味とか何らかの形で続けていきたいです。

memo ロボットナース 2010年春からラチオつくばで放送されたラジオドラマ。脚本は冠木新市さん。今月の毎月曜夜10時30分から再放送されている。映画「サイコドン」は「ロボットナース」の続編でもある。

声を掛けてもらって助けられたり、励まされたりしています。